

國學院大學學術情報リポジトリ

天神祭祀と天神講

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 服部, 比呂美, Hattor, iHiromi メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000352

天神祭祀と天神講

はじめに

受験シーズンともなれば、都内の湯島天神や亀戸天神には夥しい合格祈願の絵馬が奉納される。ここで祀られる天神とは言うまでも無く、天津神ではなく、菅公すなわち菅原道真である。ある一定の年代層の人びとは、「菅公」といえば黒い詰め襟の学生服を思い浮かべるに違いない。学生にとって、学業成就を祈願した天神様ほどなじみ深い神仏はないのではなからうか。

一方で、日本各地で行われてきた天神祭祀に「天神講」があ

る。民俗学ではこれを、天神様の縁日である二五日に、子どもたちが米を集めて宿で五目飯を食べたり、神社に習字を奉納したりする行事と理解しており、そこには信仰というよりも社会伝承としての役割を見出してきた。

民俗学から天神講を研究したものとして、桜井徳太郎氏の『講集団成立過程の研究』がある。この中で桜井氏は、天神講の子ども組が奉斎する神社が必ずしも天満宮ではないことや、天神講が必ずしも子どもだけの専担によって行われているわけではないことなどをあげ、天神講の成立発展には、地域社会の氏神から天神信仰の興隆とともに祭神を菅原道真と仰ぐようになっ

服部比呂美

た第一段階、こうした天神信仰が成人の世界から衰退し子どもの生活領域へと吸いこまれた第二段階があったと指摘している¹⁾。地域社会における天神講の展開について段階的に明らかにしようとした研究姿勢は評価できるが、それらは断片的な事例を根拠にしており、天神講の実態をとらえて構造的に考察したものとは言えなかった。

その後も、現地調査に基づく研究集積から地域的な差異を明らかにするような研究は行われてはならず、民俗学において天神講に関する研究が進展したとは言えない。

本稿では、天神講研究の新たな一歩として、これまでに筆者が現地調査を行った静岡県沼津市、新潟県柏崎市の天神講の実態を手掛かりに、先行研究もふまえながらその地域的特色について考察したい。さらに、同一地域の天神祭祀も考察指標に加えることよって、天神講には複数の形態があることを明らかにしたい。

一、静岡県沼津市の天神講の形態

かつて筆者は、沼津市内の天神講の実地調査を行い、この中から市内の天神講はすべてが同一の形態ではなく、小学校の入

学・卒業を強く意識するタイプと意識しないタイプに分類できることを明らかにした²⁾。本稿では、ここからの考察範囲を静岡県全域に広げて、天神講の形態を再検討する。

(一) 沼津市内の天神講の実態とタイプ

まずは沼津市内の天神講の形態を事例の概略とともに示しておく。

浮島地区の井出や平沼では、一月二五日ごろ、子どもたちが宿となつてくれる家に米を一合ずつ持ち寄つて集まり、夕食をご馳走になつた後、半紙に「天神講」などと筆で書いて天神社に奉納している³⁾。

このように、子どもたちが共同飲食をすることも天神社に参拝して学業成就を祈願する形態をもつ天神講は、A学業成就を天神社に祈願するタイプに分類できる。ただし、この中でも、沿海地域に見られる天神講には異なる要素が加わる。

たとえば西浦地区の河内では、御崎神社の境内にまつられる天神社で、正月と五月と九月の日曜日、子どもたちが各家を回ってもらい歩いた材料を持参して宿の家に集まり、大人に手伝ってもらつてご飯を作った。三年生以下の子どもは仮名で、四年生以上の子どもは漢字で「松竹梅」などと書いたものを持って

天神社にお参りした後、女兒は宿に、男児は聖神社に泊まったという⁽³⁾。このような形態は、静浦、内浦地区にも見ることができ、子どもたちが主体的に天神講を複数回遂行していることや、子どもだけで宿に泊まっていることなどの要素から、これはAタイプとすべきかもしれない。

いずれにしてもAタイプでは、天神社に習字を持参して学業成就祈願をすることが不可欠な形態といえる。

一方で、小学校の入学・卒業を意識する形態をもつBタイプの天神講では、共同飲食はするものの必ずしも天神社への参拝はともなわない。

たとえば、岡宮地区の西久保では、天神講がアガリ講サガリ講とも言われた。三月になると、四月に小学校一年生に上がるアガリコの家で子どもたちにオフルマイをし、子どもの仲間に入れてもらうことが天神講の趣旨だったという。昭和四三年に岡宮公民館が竣工したため、その後は公民館で行われるようになったようである⁽⁴⁾。現在では「子ども会」がアガリ講サガリ講を主催している。岡宮地区の旧来の町内である寺下・馬場・西久保・宮上・宮下・中尾に、中尾台・双塚・二又久保・大泉寺の新たな単位子ども会が加わった。三月上旬、門池小学校に入学する新一年生から六年生までが子ども会単位で岡宮公民館に

集合し、新一年生を上級生に紹介、卒業する六年生を送る会になっている⁽⁵⁾。

Bタイプは愛鷹地区柳沢や大平地区戸ヶ谷などにも見ることができる。柳沢では、卒業の時にサガリ天神と入学のときに行うアガリ天神を男女別で行った。子どもたちは米を持って宿に集まってご馳走になってから、天神さんにお参りしたという。大正時代ぐらいには、宿で習字を書いてから天神さんに奉納したともいい、こうした事例はBとすべきなのかもしれないが、行事の趣旨は子ども小学校入学と卒業を祝うことにある。

(二) 異なるタイプの天神講が生じる要因

以上見てきたように、沼津市内の天神講は、A学業成就を天神社に祈願するタイプとB小学校の入学・卒業を意識するタイプの天神講があるといえる。では、こうした差異はなぜ生まれてくるのだろうか。

① 社会的な背景

異なるタイプの天神講が生まれる背景には、地域の社会的な特色があると考えられる。小学校の入学・卒業への意識が薄いAタイプの天神講が行われている地域は、年齢階梯制があり、

強い結束力のある若者組が存在した地域である。そのため、天神講も子ども組のリーダーによって行事が遂行され、若者組のあり方を模倣して、子どもたちだけで宿や神社に泊まることが行われたと考えられる。

また、こうした地域は子ども会がない地区でもある。沼津市内の子ども会組織は小学校区単位に編成されている。市内でも急激な人口増加による開発が進まなかった地域では、学区と地区に変化が生じず、従来どおりの範囲の中で子どもたちが集団化することができ、子ども会の必要性がなかったのだろう。しかし、こうした変化の大きかった地域では、地区よりも学区が子どもたちの集団化する紐帯要因となり、同一小学校への入学や卒業を強く意識するアガリ講サガリ講が伝承されてきたと考えられる。

②天神社の分布

Aタイプの天神講では、子どもたちが必ず天神社に参っている。また、その多くは年に一度ではなく数回参拝していることから、天神講と天神社との関係性を考察する必要がある。

現在、沼津市内では、天満宮や天神社と称して公式の登録を受けているものは、金岡地区天神尾の天神社、楊原地区上香貫

西島町の天満宮、上香貫天神洞の天神社、静浦地区口野の天神宮、西浦地区足保の天神社というように、ごくわずかである。⁽⁸⁾

しかし、こうした神社とすべての天神講が結びついているわけではなく、子どもたちは身近なところに祀られた天神の小祠に参拝することの方が一般的である。桜井徳太郎氏は「静岡県(9)の東南部、伊豆半島の各部落に入ると、いたるところで天満宮(8)の小社にめぐり合う……」と書いているが、こうした小社や小祠を沼津地域の地図上に示し、その上に天神講のA・Bタイプの分布を重ねることで、天神講と天神社との関係をさらに明らかにすることは今後の課題である。

二、静岡県内の天神講と天神祭祀

(一) 静岡県東部地域の天神講

これまで見てきた沼津市内の天神講の構成員は、小学生に限られていた。しかし、静岡県東部地域では、中学生が小学生を率いて行ってきた天神講も存在する。

裾野市須山区田向では、参加資格が四歳以上中学三年生までという幅広い年代層が集う天神講が行われている。もともと田向の天神講は二月の初午に行われていたが、現在では、この時

期が講の中心となる中学三年生の高校受験と重なるので、受験の終わった三月中旬に変更されている。

かつては田向の坂上・中村・下村の三地区それぞれに宿があり、集落の個人宅に祀られた天神様の祠にお参りしたが、後に公民館で行う田向の天神講として生まれ変わった。祭りの当日は、朝から公民館で中学三年生の指導のもと、参拝や食事の準備をする。接待されるのは小学生と幼稚園児、そして四月から子ども会のメンバーとなる四歳児である。

天神様の祠に着くと、その前に四色の紙を貼り合わせたものに「奉納 天神天満宮」と墨書した幡を立て、赤飯を供えて「東風吹かば 匂いおこせよ梅の花」という道真の歌を唱和する。集会所に戻った子どもたちは、天神講の掛軸を下げた部屋で、四月から幼稚園児になる子どもが紹介され、余興や食事を楽しむ¹⁰⁾。こうしたあり方は、幼稚園入園と中学校卒業という学齢を意識しながらも、天神の祠に参拝し、集会所では掛軸を祭っていることから、Bタイプともいえる。

(二) 静岡県中西部地域の天神祭祀

静岡県内の天神講は、沼津市以西の報告が極端に見られなくなる¹¹⁾。そのため、県内の子どもに関わる天神祭祀を見ながら天

神講の分布を考察してみたい。

まずあげておきたいのは、男児が生まれると母方の里から贈られる天神人形である。多くは端午の節供ではなく桃の節供に飾られる。特に富士川以西大井川以東に顕著に見られるのは「志太天神」と呼ばれる天神人形である。肌色の顔に豊かな眉と髭、跳ね上がった袖の豪華な衣装を着けているのが特徴である。もともと、旧志太・榛原郡では、江戸時代末期から明治初期にかけて土で作った練り天神が製造され、その後人形の胴体が藁になり、布の着物を着た衣装天神へと発展していった¹²⁾。

東部地域では、天神講の場で天神の掛軸は掛けるものの人形は祭らず、節供に天神人形を飾る習俗の分布も薄い。逆に、節供に天神の人形を飾る習俗が濃厚な東部以西では、天神講の分布は薄くなっている。こうしてみると、天神講の濃淡と祭祀対象とは関係があるともいえる。

そこで、天神祭祀に際して何を祭祀対象にしているのかを確認してみると、天神講のA学業成就を天神社に祈願するタイプでは、天神社と掛軸が対象になっているが、B小学校の入学・卒業を意識するタイプでは、特に具体的な祭祀対象は見られない。そして雛節供の場面では、祭祀対象として天神人形をあげることができるといえる。このように、静岡県下の天神祭祀における祭

祀対象は、(ア) 天神社、(イ) 掛軸、(ウ) 具体的な祭祀対象はもたない、(エ) 人形ということが出来る。

三、新潟県柏崎市の天神祭祀と天神講

柏崎市内の家々では、一二月二五日ぐらいから大晦日の間に、木製や土人形などの天神様を飾り、初天神の一月二五日にしまう習俗がある。

『高志路』第三九二号の小特集「正月に祀る天神」では、三井田忠明氏が多角的な面から柏崎の天神祭祀を検証している。天神祭祀に年取りの夜を重視していることや天神様に鏡餅や塩引き鮭の一の鱸(胸鱸)などを供えること、天神様の飾りは家長や長男という男性に限られたこと、祭壇には家業を示すものも飾ることなどを根拠に、柏崎の天神様には、基層部に歳神信仰があり、その上に天神を祭る習俗が重なり、さらに家を象徴する品物が加わるといふ重層性を持っていると指摘する。また、柏崎の天神様には学問の神としての性格が希薄で、学業成就を目的に行われる天神講とは切り離して考えるべきであると述べている。

本章ではこうした考察をふまえながらも、静岡県内で行った

ように、当地の天神祭祀を視野に入れながら天神講の形態を析出してみたい。

(一) 「天神さま街道」に見る天神祭祀

現在、柏崎市から隣接地である三島郡出雲崎町にかけて、家々や公共施設で祭る天神像を公開する「天神さま街道」という催しのきっかけは、平成一九年(二〇〇七)七月一六日に発生した中越沖地震であった。震源地に近い柏崎市には甚大な被害もたらされ、特に築年数五〇年を超えた店舗併用の木造住宅のあつた東本町、西本町、新花町、中央町、小倉町、諏訪町、日吉町では倒壊した家屋が多かった。



写真1 天神さま街道マップ

地震後、こうした家屋から、破損した家財道具とともに、多くの天神人形が廃棄物集積所に集められた。これを見た三井田忠明・あつ子夫妻は、衝撃を受けると同時に、こんなにも多くの家々で天神様を祭っていたことを再認識し、柏崎の天神文化の継承を強く願うようになったという。身近な人に声をかけ、天神様を公開してくれる家を探し、天神さま街道のマップ（写真1）は自費で作成して始まったこの催しは、平成三〇年に八回を重ねることとなった。

本節では、平成二七年一月二四日・二五日に調査を行った「天神さま街道」から、天神祭祀のあり方を見てゆく。

① 柏崎市内の天神祭祀

柏崎駅に降り立つと、目の前に開けた道には紫色の布地に「天神さまめぐり」と白抜きされた幡が並ぶ。

スペース「あまやどり」では、自主グループの方がたの手芸作品とともに天神飾りがされている。天神座像が描かれた掛軸の前には、鼻の下と顎に髭を生やし、尺を両手にもって両足を体の真ん中で合わせた姿で、黒地に金の梅鉢紋が彩色された袍に黒い冠を着けた木彫天神座像が飾られている。天神人形の多くは親王台と呼ばれる色鮮やかな台の上に鎮座している。天神

の両側には、

それぞれ黒と

赤の地色に梅

模様配され

た袍を着けた

左大臣・右大

臣の随臣が、

虎皮の敷物の

上に片足は下

ろした姿で座している。

壁面には、倒壊した土蔵から出た布を草木染めし、柏崎の十二か月の歳時記をパッチワークにした大きなタペストリーが飾られている。一月は当然のように天神様であり、六月は閻魔市、八月は海水浴で賑わう柏崎海岸などが選ばれており、ここには柏崎の人びとが育んできた文化が縫い込まれていると感じた（写真2）。

東本町の「北野屋スポーツ」では、蔵の中に天神様が祭られている。四段の階段に緋毛氈が敷かれ、最上段には胸に金泥の星梅鉢紋が配された高さ三〇センチほどの木彫天神座像、二段目に随臣、三段目には、招き猫の切り紙（ハッチョウガミ）の



写真2 天神様の縫い込まれたタペストリー

上にみかんを載せた大きな鏡餅と榊が供えられている。最下段には三方がおかれ、神酒と蠟燭が供えられている。この天神様は一代目の現当主に伝えられたもので、一月二十五日のしまい天神に飾り、初天神の一月二十五日までの一カ月間飾るといふ。西本町の「越後みそ西」では、御簾を下げた階段つきの木製の御殿に天神様が祭られていた。これと同じ形式の天神は、福井県坂井市三国町でも見たことがあるが、柏崎では珍しい。下ぶくれのふっくらとした天神様の顔立ちもこれまでの見てきた人形とは印象が異なる。

同じく西本町の丸小鮮魚店では、当主である小林市郎氏によれば、小林家では大晦日に天神様を飾って鮭を供え、一月二十五日にはふぶきもち（黄粉餅）を食べて天神様をしまうという。この天神様を収納するための箱書きには「弘化三年午正月吉日小林紋治郎」とあることから、人形の制作年代は十九世紀半ば頃と考えられる。

床の間には、漢文の讃と水墨画が書かれた一対の屏風を置き、その前に三段式の台を据えている。最上段には、漆塗りの台に親王台を重ねた上に、右手に尺を持ち、胸の真ん中に金で星梅鉢紋を描いた袍をまとう木彫天神座像、その両脇には徳利二本が並ぶ。天神様はこれまで見たものの中でもっとも大きいサ

イズである
(写真3)。二

段目には随臣
と三方にのせ
た徳利と蠟
燭、三段目
は、正面にみ
かんを載せた
鏡餅、両脇に
はみかんとり
んごを盛った

三方が三台供えられている。そして、段飾りの下には、朱塗りのお盆の上の皿に、鮭の切り身（胸鰭の部分）と割り箸が供えられている。小林氏は「由来はわからないが代々続けてきたことなので、今も行っている」というが、小林家の飾り方は古い形式を残したものではないかと思われる。

出雲崎町に隣接する宮川の吉田隆介氏のお宅は国指定登録有形文化財の「妻入りの家」として知られる。妻入りとは、間口が狭く、奥行きが長い建築様式で、小高い丘と日本海に挟まれたわずかな平場に家を建てるためであり、間口によって税金が



写真3 柏崎市西本町 小林家の天神飾り

掛けられていた時代の産物でもあるという。吉田家の玄関から部屋まで続く部分には、鮮やかな朱漆が施されている。そこからは、宮川が北前船の中継地として栄華を極めたことや、その恩恵を受けた吉田家がニシン網を北海道に運んで財を築いた歴史などがうかがえる。

当家の天神様は床の間に飾られている。右手に尺を持つ木彫天神座像の両側の随臣は、珍しく両足を下ろしている。床の間の右手に下げられた餅花は、柳の枝に白や桃色の小さな餅がつけられたものである。

宮川には篤く信仰されていたという天満宮がある。小高い丘の上に建つ天満宮は、竜泉寺の敷地内にあった。中越沖地震ですべての建物が壊れてしまった後、このお堂だけは建て直された。そこに保管されているというご神体の天神像と天神様の画像を見ることは叶わなかったが、宮川の人びとの精神的なよりどころは、ここに確かにあることを感じた。

② 柏崎市野田の天神講

現在でも子どもたちが祭る天神講が行われているのは、柏崎市内では野田だけである。一月二五日、午後四時半に会場の野田のコミュニティセンターに行くと、子どもたちはすでに集

まっけて、部屋の真ん中に置かれたストーブの回りでカルタなどに興じている。この日は日曜日で、六年生はサツカーの試合が終わってから来ることになっている。保護者は飲み物や菓子などの準備をしていた。

畳敷きの部屋の正面には天神様の掛け軸が三幅下げられている。その前に、随臣をもたない三体の天神様が飾られている。人形が収納されていた箱の一つに「天神様」昭和二十三年野田村熊谷 梅澤哲宗作」と書かれた紙が貼られている。梅澤哲宗は、野田の石工で住民の求めに応じて木彫像を制作した人物と思われる。¹⁴⁾

また、センターの二階から、白地に「發七十五歳翁 菅原道日徳祝書」と墨書された大型の幡が下げられる。菅原道日徳(宝暦八年(一七五八)〜弘化二年(一八四五))は本名・成田長孝、越中(富山県)出身の江戸後期の書家で、京都で松下烏石(うせき)の門に学んだという。富山県高岡市朝日山上日寺の観音堂には長孝の筆による「大慈神呪」の扁額が残され、ここに天保六年(一八三六)七十七歳とある。長孝は、桃山から江戸期において盛行を見た大師流の書に天神信仰をプラスして菅原流を名乗ったが、一代限りの書流に終わったという。¹⁵⁾長孝が揮毫した幡が野田の天神講で下げられていることから、水見や高岡

と野田との間には古くからなんらかの交流があったとも考えられ、興味深い。

しばらくすると、この伝統をよくご存知の小池一弘氏が来られた。五時半には六年生も揃って、天神像の前に低学年を最前列に子どもたちが正座すると小池氏が灯明をあげる。天神講が始まった(写真4)。

はじめに低学年の子ども四人が一番前に出て座り、二礼二拍一礼すると全員がそれに従う。続いて六年生の男子児童二人が、道真について説明した。

最後に小池氏から、野田の天神講は明治半ばぐらいから継続してきた行事であることや、かつては六年生が行事を仕切ったこと、四月に新しく一年生になる子どもの仲間入りの日でもあったことなどの話があった。この日も女兒二名が紹介され、



写真4 野田の天神講

かわいらしい声で「よろしくおねがいします」と挨拶した。本来は子どもが自主的に行ってきた野田の天神講は、現在は小池氏の熱意で継承されているようである。

以上のように、「天神さま街道」の様子を叙述してきたが、柏崎市内で天神講も含めた天神祭祀の形態を分類してみると、まずはA家々で天神を歳神として祭るタイプとB天神講で子ども仲間が集まるタイプに分けられる。Bタイプは、子どもたちが宿に集まって遊んだり共食したりして一日を楽しく過ごすことに特徴がある。ただし、野田の事例では子ども仲間の加入を祝う要素も見られるため、正確に言えばBとすべきかもしれない。

次に両タイプの祭祀対象を見てゆくと、いずれも木彫天神座像と掛軸である。強いて異なる点をあげれば、Aタイプは天神と随臣がセットになった段飾りであるが、Bタイプは段飾りではなく随臣も伴わないという飾り方にある。

(二) 柏崎市内の天神講

前節では、柏崎市内の天神祭祀から二つの形態をあげた。しかし、Bタイプは野田の天神講のみが根拠となっているため心もとない。本節では過去に行われていた柏崎市内の天神講の記

録から考察を加えたい。

吉尾では、二五日は天神講の日で、子どもたちは、宿に集まり、床の間に天神様の掛軸をかけ、カルタや双六をしたり、歌をうたったりして一日を楽しく過ごした。宿ではご飯を平たく卵形に握ってヨロリで焼き、クルミ味噌をつけた「ザワ」を作って食べさせたという。¹⁶⁾

拝庭の天神講は、子どもたちが予めきめた宿に米一、二合持って集まり、床の間に天神様の掛軸をかけ、マイ玉のお花をあげる。この日はシヨッパイマンマといって醤油ご飯や五目飯をつくり、床の間の天神様に供えて食べた。子どもたちは一晩中遊んで楽しむ。天神様は勉強の神様だからよく拝めといわれた。¹⁷⁾

成沢では二月二五日に子どもたちが回り番の宿に集まって天神講をする。床の間に天神様の掛軸をさげ、小豆ご飯を供えて宿で作ってもらったご馳走を食べて、一晩泊まりで遊ぶ。¹⁸⁾

これらの天神講の事例は、子どもたちが集まって楽しむBタイプ¹⁹⁾の天神講の形態である。

一方、鷹の巣では、ムラの分教場を会場として行っていた頃、二四日夜から二五日に天神講が行われた。米、野菜は勿論のこと、寝具持参の一晩泊りであった。日暮れ時分になっても泊り込みの準備が終わらないと、若い衆たちが面白半分に雪玉を会

場に投げ込んだり、階下へ侵入して松枝いぶしを仕掛けたりするので、大変な騒ぎになって隣家に助けを求めることもあったという。¹⁹⁾この事例では、子ども仲間だけでなく娯楽的な要素を持ちながらも、若者組と交流している点から、新たな天神講の形態として、C子ども組と若者組が交流するタイプ²⁰⁾をしたい。

以上のような結果から、柏崎の天神講も含めた天神祭祀の対象を確認すると、家々の天神祭祀や野田の天神講では天神人形と掛軸であり、記録の中の天神講では掛軸であった。つまり、柏崎市内の天神祭祀の祭祀対象は、(ア)天神人形、(イ)掛軸をあげることができる。

四、新潟県内の天神祭祀

前章で、柏崎市内の天神祭祀の祭祀対象を確認し、天神人形と掛軸があることを述べた。しかし、柏崎の昔話や習俗をまとめた山田貢氏は「僕の家では、少なくとも田尻附近の何処の家でも、お年取りの晩（大晦日）には天神様を飾って御酒と三色の菱形の餅を供へ、天神経を読んで、大神様や如来様と同じように拝んだ。」²⁰⁾と書いている。ここには、他には見られなかった「天神経を唱える」という新たな祭祀方法をあげることがで

きる。

本章では、天神経を唱える祭祀方法と、掛軸や人形という祭祀対象に焦点をしばり、それぞれから新潟県内の天神祭祀の考察を深めてゆきたい。

(一) 天神経を唱える

柏崎の天神経については、松山雍二氏が次目で聞き書きしたという天神経が『高志路』(通卷二八号)に掲載されている²¹⁾。筆者は柏崎で天神経に関する伝承を聞くことはできなかつたが、かつては柏崎周辺でも天神経を唱える行為は珍しくなかつたのかもしれない。

溝口政子氏は、新潟市東区海老ヶ瀬の天神祭りには、天神を家々で祭る形態と子どもたちが天神経を唱えて集落の家を回る二形態があることを紹介している。子どもたちが行う形態は、三〇年ほど中断したが一二年前に復活したという。祭日には、公民館で天神経を練習した子どもたちが、読経を希望する家々を訪れて天神様が祭られている座敷にあがる(写真5)。年長者が「てんじんきょう」と唱えたのを合図に全員で天神経を唱え、終わると家の人から菓子などをもらうという²²⁾。ここでは、家の人びとは「天神経」を唱える子どもたちを天神の司祭者と

して丁重に迎えているといえる。こうした形態から、新潟県内の天神祭祀の形態に、D天神経を唱えて祭るタイプを加えておきたい。

昭和四年に高橋俊乗氏が全国の寺院に実施したアンケート結果をまと

めた「寺子屋における天満天神の信仰」²³⁾では、寺子屋で天神社に参拝する際に行うことの回答に、清書した習字の奉納、天神経の読経、幟の奉納などがあげられている。こうした行為は、現在の天神講の内容にも反映していると考えられる。

天神経のテキストは通常の折本式とともに、『天神経絵入講釈』などの版本が知られており、寺子屋の子どもたちにとって身近なものだったであろう。

服部法照氏は偽経研究の立場から、埼玉県入間郡越生町小杉



写真5 新潟市東区海老ヶ瀬 天神経
写真提供：溝口政子氏

の曹洞宗大護山円通寺に所蔵された「天神経」を翻刻し、内容について分析している。この教本の構成は、経文、真言、種子、御十号、称名と真言を合体させた唱え文句、さらに和歌と歌の功德があり、最後に六根清浄の戒いとなっている。服部氏は「実在した日本人に対して経典を作り、さらに真言らしきものまで考えだしたという現象は、仏教の土着化の最たるもの」と述べ、また、この中の書道の上達を祈願する三首目の歌「我たのむ人を空しくなすならば天が下にて名をやながさん」が、南北朝の頃に成立した「天神講式」(『続群書類従』巻第五七)にも納められていることを指摘する⁽²⁶⁾。講式は、寺院において本尊の掛軸などに向かつて、仏や先徳、高僧の業績を述べ、それを賛美するものであるが、春日講式、八幡講式、天神講式など神祇の講式も作られるようになった。柏崎市や新潟市で子どもたちが唱える天神経は、こうした歴史性をもっているのである。

(二) 天神の掛軸

柏崎市の家々で祭られる天神人形の背景には、天神の掛軸も掛けられていることが多く、天神講の場では掛軸が祭祀対象となっているように、当地では天神像が描かれた掛軸が広く普及している。これは、隣接の三島郡出雲崎町でも同様である。

出雲崎町では家々の天神祭祀は確認できなかったが、尼瀬の「北国街道妻入り会館」と「天領の里」で多くの掛軸を見ることができた。

北前船の寄港地でもあり北国街道の宿場町でもあった交易地・出雲崎の豊かさが、多種多様な天神様の掛軸に残されている。

肉筆のものも印刷されたものもあり、肉筆には天神座像が描かれたもののほか、牛乗り天神に梅、天神座像に松と梅、座像に波と松、座像に漢詩が記されたものなどがある。化学染料が用いられたカラフルな印刷物の掛軸には、座像の上に「菅公神詠」とともに和歌が書かれたものや、最上段に天神、二段目に随臣、三段目に二匹の狛犬が配される形式をもつものがあり、こうした印刷物の掛軸の上部には幕が描か



写真6 三島郡出雲崎町 天領の里

れているという特徴がある(写真6)。また「大威徳天満大自在天神」と神名だけが書かれたものもある。天神講はすでに元久元年(一二〇四)には北野社で始められ、ここでは管弦を奏し、歌舞を催し詩歌が詠じられたというが、こうした場で礼拝対象となったのが、天神名号や天神御影の掛軸であった。

赤井達郎氏は、地方から天神講の座に掛けるための天神名号を求められ、公家たちが盛んにこれを揮毫している『言継卿記』の記録は、天神講の地方への伝播を示しており、町衆や郷民という新しい社会層の台頭が、連歌会などとともに天神講の在地化を促したと述べている。また、天神講創始の時期に北野天神縁起が成立して以来、その信仰唱道の過程で、各地にさまざまな性格を持った天神縁起が展開し、その絵巻物も在地で作られるようになったと述べる。こうした地方の絵師たちが、その後

も多様な天神像の掛軸を生み出す担い手となったことだろう。福井県の嶺北地方では、柏崎と同様、正月には天神様の掛軸を床の間に祭り、一月二五日の朝、お神酒、焼きガレイ、雑煮またはごはんを供え、鏡餅をおろしてぜんざいにして食べる(写真7)。夕方には、掛軸とともに子供えをさげ、焼きガレイは子どもに食べさせて学問の上達を願い、天神様にお帰りいただくという。川波久志氏は、こうした習俗が定着した要因として、

福井城下で活躍した町絵師・夢楽洞万司の存在があったと述べる。

夢楽洞が大首絵の手法を用いて描いた「まん

し天神」と言われる天神掛軸は、幕末から明治にかけて大流行し、素人がこれをまねた掛軸も「まんし天神」と呼称されたという。⁽³⁰⁾

福井の事例からは、行事に用いられる飾り物の普及が、祭祀対象の形態にも影響するといえる。柏崎や出雲崎では掛軸の雅号を書き留める余裕がなかったことが悔やまれるが、今後はこうした調査を行うことによって、在地の絵師と掛軸の広がりとの因果関係が明らかになるかもしれない。



写真7 福井県あわら市 正月の天神祭祀
写真提供：畑山和浩氏

(三) 天神人形

前節では、在地の職人の存在が祭祀対象を左右する要因があると述べたが、同時に信仰目的にも影響するといえるのではなからうか。

新潟県内の家々の天神祭祀を見てゆくと、一月二四日か二五日、あるいは月遅れの二月二五日の初天神に、床の間に天神の掛軸や人形を飾り、学業成就を祈願する形態が多く見受けられる。ここには天神を歳神とする意識は見られない。

越路町では、二月二五日が天神様の日で、神谷では床の間に菅原道真の掛軸を飾り、おほぎを供え、燈明をあげる。その前に子どもたちは正座し、頭がよくなるようにと祈り、声をあげて教科書などの本を読んだという。西谷でも、子どもが天神様の掛軸の前で勉強すれば、成績があがるといった⁽²¹⁾。

燕市では各家で行う天神祭祀を「天神講」と呼称しているようである。二月二四日は宵天神、二五日は天神様の日で、各地では、床の間に天神様の掛軸や土人形、それに松・竹・梅、御神酒・灯明・あられ・天神菓子などを供えるという。子どもたちは、天神様の掛軸の前で習字をしたり本を読んだりした後で、天神様の粉菓子や黒砂糖で煎った砂糖豆のあられを食べ、線香花火をして遊んだ⁽²²⁾。

吉田町では、二月二五日を天神講、または天神祭りと言い、子どもがいる家では各家で天神講を行った。子どもたちは二四日に学校から帰ってくると、部屋と床の間を掃除し、さらに床の間に天神様の掛軸や天神様の人形を飾り、松・竹・梅の木と天神菓子を供えてお参りをしたという。二四日から二五日の晩は、天神様で勉強すると字が上手くなる、頭がよくなるといわれた⁽²³⁾。

これらの信仰目的は子どもの学業成就で、天神祭祀の形態としては新たに、E家々で天神に学業成就を祈願するタイプに位置付けられる。

掛軸とともに人形を飾るというあり方は、柏崎の飾り方と同様であるが、信仰目的には歳神祭祀と学業成就という大きな違いがある。これはどこから生じているのだろうか。わずかな手がかりではあるが、学業成就を目的とする祭祀対象の人形の中に「土人形」があることは見過ごせない。

柏崎の木彫天神座像は、その銘文から在地の仏師が制作していることがわかつている。これらは高価なもので、手にすることができるとはある程度裕福な家々に限られたと思われる。こうした家では、歳神に一年をつつがなく過ごすことを祈願し、それが果たされることで「家の永続」が可能となると理解され

たために、歳神と天神が同一視されていたのではなからうか。一方、大久保人形をはじめとする土人形が庶民の手に渡ってゆく過程で、信仰目的は子どもたちの学業成就に定着していったと考えられる。

前述のように、静岡県中西部地方で三月節供に男児のための天神人形を飾るという習俗は、志太天神がもたらしたものと見える。同様の習俗は山陰山陽地方にもあり、広島県では男児には初天神、女児には初雛の画軸や土人形が縁故者からおくられたというが、その需要に応えたのは、三次人形や三原人形と呼ばれた節供泥人形であった。島根県や岡山県にも、男児に「泥天神」と呼ばれる人形を贈る習俗がある。節供泥人形を受容した地では、「人形を贈る」文化も同時に受容したのである。

物語が付与されることによって、年中行事の飾り物への購買意欲はいやが上にも高まる。男児の「立身出世」は、近代日本において国民的な願望であった。秀才の誉高い道真の伝記と学業成就を叶える天神への信仰は、大きな物語となって天神関係の商品開発を後押ししたことだろう。こうして各地で生産されたさまざまな天神人形に在地の思想が反映されることによつて、信仰目的にも差異を見せることになったのではなからうか。

おわりに

本稿では、現地調査を行った静岡県沼津市や新潟県柏崎市の天神祭祀の実態から、これまで民俗学でも等閑視されてきた天神講の地域的特色の考察を試みた。

静岡県内で、天神講を見てゆくと、そこには次の二タイプの天神講の形態が存在した。

A 学業成就を天神社に祈願するタイプ

B 小学校の入学・卒業を意識するタイプ

AとBタイプの分布は静岡県東部地域に集中している。また、子どもたちが天神講を行う場合、構成員は小学生だけの場合と小学生と中学生が合同で行う場合がある。

これらのタイプで、何を祭祀対象にしているのかを確認すると(A)天神社と(イ)掛軸、(ウ)具体的な祭祀対象は持たないという結果になった。Aタイプの天神講では、天神社に参りすることが不可欠な要素になっており、参拝回数は年一度ではなく三回の場合が多い。しかしBタイプでは必ず天神社に参拝するわけではなく、開催されるのは三月の年一回である。

静岡県中西部では、子どもたちの天神講が見られないため、

考察範囲を天神祭祀に広げてみると、家々で男児の節供に天神人形を飾る習俗がある。その際の祭祀対象は(エ)人形であり、ここには志太天神のような地場産業の影響があると考えられる。一方、柏崎市を中心に新潟県内の天神祭祀と天神講を見てゆくと、次の形態が析出される。

- A 家々で天神を歳神として祭るタイプ
 - B 天神講で子ども仲間が集まるタイプ
 - C 天神講で子ども組と若者組が交流するタイプ
 - D 天神経を唱えて祭るタイプ
 - E 家々で天神に学業成就を祈願するタイプ
- 柏崎市内で行われていた天神講はBタイプが多く、天神様の掛軸を下げた宿で子どもたちがご馳走を食べて遊ぶという娯楽の機会であった。Cタイプは、こうした子ども組と若者組が宿で攻防戦を行うという珍しいタイプである。これらの祭祀対象には(ア)人形と(イ)掛軸があった。
- この他、静岡県内には見られなかったが、新潟県内に見られた祭祀方法が「天神経を唱える」という行為である。柏崎市の家々で唱えられた天神経は、新潟市でも各戸で行われている。また、子どもたちが集落の家々を回って天神経を唱える場合もある。こうした形態をDタイプとした。

さらに、柏崎市で家々の天神祭祀を検証した結果、ここに顕著だったのはAタイプで、天神を歳神と意識して年末から一月二五日まで祭る形態であった。しかし柏崎以外の場所では、一月二五日あるいは月遅れの二月二五日の初天神の機会に、子どもの学業成就を祈願して天神を祭るEタイプの形態が多く、この行事を天神講と呼称する場合もあった。しかし、祭日や信仰目的は異なっても、いずれのタイプも祭祀対象は(ア)人形と(イ)掛軸であった。

以上のように本稿では、静岡県と新潟県の天神講を考察した結果、子どもたちが行事の主体であるという共通項は持ちながらも、祭祀形態や祭祀対象には差異があり、天神講には複数の形態があることを明らかにした。

また、祭祀対象である天神社・掛軸・人形と、祭祀方法の天神経を唱える行為などについては個別に検討を加えた。そこでは、各地の天神講は仏教の天神講式を介して各地に伝播して在地化したことや、人形や掛軸などの年中行事の飾り物の普及が信仰目的を変化させることなどの可能性をあげ、今後の研究課題を提示した。

これまでひとつくりにされていた各地の天神講を一つ一つ検証することは、決して簡単なことではないが、関心を持つ研究

者が皆無ではないことは心強い³⁶⁾。今後も継続して調査を行って新たな天神講の形態を発見してゆきたい。子どもたちにとつて、天神様のいらっしやる場所が合格祈願のために参拝する天神社に限られてしまうのはあまりにも惜しい。身近な場所に咲く梅の香が天神様の訪れを告げ、それを感受した子どもたちが自ら手で天神様を祭る……ささやかではあるが、生涯忘れ難い記憶として人びとの心に刻まれる天神講を、筆者は歴史の中に埋没させたくないのである。

末筆ながら、柏崎市内では筆者の突然の来訪にもかかわらず、温かく迎えてくださった吉田兵庫氏、高橋功一・愛子夫妻に、心より御礼申し上げます。

註

- (1) 桜井徳太郎 『講集団成立過程の研究』 昭和三七年 吉川弘文館 三二二～三五頁
- (2) 拙著 『子ども集団と民俗社会』 平成二二年 岩田書院 六六頁。この中では「年齢を意識しているタイプ」と「入学・卒業をあまり意識していないタイプ」に分類した。
- (3) 沼津市史編さん委員会・沼津市教育委員会編 『沼津市史』資料編民俗 平成一四年 沼津市刊 四二九頁
- (4) 沼津市史編集委員会民俗部会編 『木負・河内の民俗』 平成五年 沼

津市教育委員会刊 一二二～三頁

- (5) 前掲(2) 五八頁
- (6) 前掲(2) 五九頁
- (7) 前掲(3) 四一・四二九頁
- (8) 前掲(3) 四八七頁
- (9) 前掲(1) 三三二頁
- (10) 裾野市史編さん専門委員会 『裾野市史』第七巻資料編民俗 平成九年 裾野市刊 六七五～七頁
- (11) 静岡市内には、蒔絵師たちが職業神として天神を信仰する天神講がある。(静岡県編・刊 『静岡県史』別編一 民俗文化史 平成七年 四九九頁)
- (12) 藤枝市郷土博物館編・刊 『志太の雛人形』 平成一二年
- (13) 三井田忠明 「正月飾りとしての天神さん」新潟県柏崎市の正月行事 ― (『高志路』 第三九二号 平成二六年六月 新潟県民俗学会 一〇三頁)
- (14) 前掲(13) 一一頁。ただしここでは「梅沢文宗」である。
- (15) 小松茂美 『日本書流全史』上巻 昭和四五年 講談社 六九八～七〇二頁
- (16) 柏崎市史編さん委員会編 『柏崎市史資料集』民俗篇 柏崎市史編さん室刊 昭和六一年 六一五頁
- (17) 前掲(16) 六二五頁
- (18) 前掲(16) 六三四頁
- (19) 前掲(16) 六四二頁
- (20) 山田貢 『思出の夜話 あったとさ』 山田貢刊 昭和四二年(第三版 初版は昭和一七年) 四〇三頁
- (21) 松山雅二 「天神経と童謡」(『高志路』 第二八号 昭和二二年四月 新潟県民俗学会 四三～四頁)

- (22) 溝口政子 「海老ヶ瀬天神さま巡り」(『新潟日報』平成二九年二月二三日)
- (23) 高橋俊乗 『寺子屋における天満天神の信仰』(村山修一編 民衆宗教史叢書第四卷『天神信仰』 雄山閣 昭和五八年 二四六〜七頁/初出は『芸文』二〇巻四号、昭和四年)
- (24) 田坂順子氏による『天神経絵入講釈 翻刻と解題』(福岡大学研究部論集 通巻二八七号 平成一八年二月 一四七〜一七〇)がある。また、真壁俊信氏は『天神信仰の基礎的研究』(昭和五九年 日本古典籍註釈研究会 三三三〜九頁)の中で、溪齋英泉による浮世絵とともに『天神経』がある一幅の掛軸を写真付きで紹介している。ここには「天神経／如是我聞一時仏在須菩提／王八万四千法藏金剛般若／波羅蜜多第一梵天王第二／帝釈天第三閻羅王釈迦／牟尼仏等三千大千世界広／大福聚受経一切諸仏普敬礼／拜供養慧命須菩提王一切／明神等三千大千世界供養／諸仏普敬／南無天満大自在天神／心たにまことの道にかないなば／祈らすとも神やまらん」(は改行)とある。
- (25) 服部法照 『天神経』について(『印度學佛教學研究』第四二巻第一号 平成五年二月 一八五頁)
- (26) 前掲(25) 一八七頁
- (27) 三島暁子 『天皇・將軍・地下樂人の室町音楽史』平成二四年 思文閣 八八頁
- (28) 赤井達郎 『絵解きの系譜』平成元年 教育社 三五一〜四頁
- (29) 福井市編・刊 『福井市史』民俗 昭和六三年 三一〜二頁
- (30) 川波久志 「福井県嶺北地方における正月の天神と節供の天神(一)」(『福井県立歴史博物館紀要』第一号 平成二七年三月 二〇頁)
- (31) 越路町編・刊 『越路町史』別編二民俗 平成一三年 七二頁
- (32) 燕市編・刊 『燕市史』民俗・社会・文化財編 平成二年 二七三頁
- (33) 吉田町編・刊 『吉田町史』資料編六民俗 平成一四年 三六六頁
- (34) 大竹信雄 「我が家の天神さん」(前掲13) 一六頁
- (35) 藤井昭 『日本の民俗 広島』昭和四八年 第一法規出版 二一四〜五頁
- (36) 相澤出氏は「ムラの子供の集団とその行事」(『東北民俗』第五〇巻 平成二八年六月)と「地域の子供の集団とその行事の変遷」(『東北民俗』第五一卷 平成二九年六月)で、宮城県名取市植松で現地調査を行って当地の天神講の変遷を論じ、また大正期の文書「植松北天神講文書」から、植松の天神講の子ども集団には高い自律性があつたことを検証している。こうした研究が各地で行われることを望みたい。